

TAKASHI
HIROSE

広瀬
隆

チエルブイリの
少年たち

ドキュメント・ノベル



新潮文庫

平成二年三月十五日 印刷
平成二年三月二十五日 発行

著 者 広^{ひろ}瀬^せ隆^{たかし}

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・凸版印刷株式会社 製本・株式会社大進堂

© Takashi Hirose 1988 Printed in Japan

ISBN4-10-113232-1 C0193

新 潮 文 庫

チェルノブイリの少年たち

ードキュメント・ノベルー

広 瀬 隆 著

新 潮 社 版

4436

目次

運命の金曜日	六
大草原の惨劇	二三
第二夜の訪れ	三九
危険地帯からの脱出	五六
孤独な少年	七三
検問	九〇

病棟	一〇八
捜索	一二五
キエフの空の下	一四三
イワンの脱走	一六一
チェルノブイリ現地の真相	一七七

チエルノブイリの少年たち

―ドキュメント・ノベル―

運命の金曜日

「ああ、神様、どうか助けてください……」

ドドーンという巨大な爆発音が、ウクライナの闇に轟いた。

一九八六年四月二十六日、といっても人間の感覚のなかでは、実際にはまだ二十五日の金曜日、夜十二時を回っていくばくもない、夜中の一時二十三分からはじまった出来事である。時刻をこれほど正確に記しておくのは、これが人類にとって異様な事件で、後日に想像を絶する大惨事に発展したからである。その時には、地上の誰ひとりとして、この事態の深刻さに気づかなかった。

わずかにこれを目撃した土地の人びとは、いきなり恐怖の底に突き落とされ、暗がりのなかで釘づけになった。鬼気に取り憑かれ、目の前で激しく燃えさかる炎の塊を見やっているばかり。爆発した建物からは火炎が激しく立ち昇り、真っ赤な影を、つややかな黒い夜空に浮かびあがらせていた。

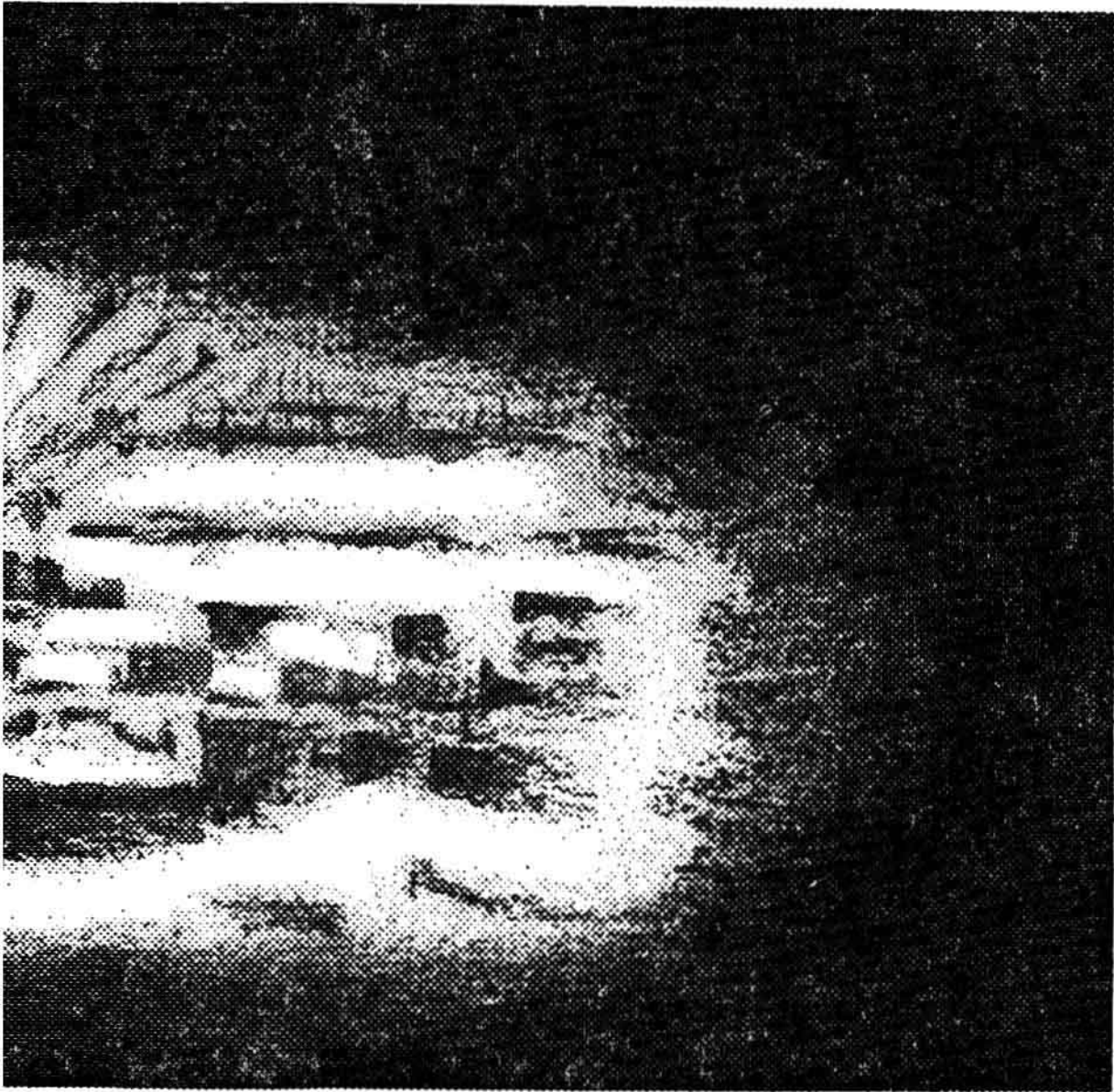
四角張って何の変哲もないコンクリートの建物だったが、いまは炎が揺らぐたびに影が踊り、全体が一羽の巨大な鳥のように動いて見えた。ちょうど中心部から大空に伸びている煙突が鳥の首のように細く、その左右にある構造物が翼のように張り出していた。

まだ十五歳にしかならないイワン少年が、この光景を一部始終、まだ何も起こらない静寂の夜景から、そこへいきなりパチパチと火花が散るように火の粉が舞いあがる瞬間まで、完全に目撃していた。イワンは翌朝、土曜日にはカーリーナと学校で会い、手紙を渡そうか渡すまいかと迷っているところだった。

ベッドから身を起こし、カーテンを開いて、高層アパートの四階から何気なく遠望していた瞬間、ほんの目と鼻の先に見えるチェルノブイリ原子力発電所が、意表をついてイワンの目のなかに飛び込んできた。砕け散ったコンクリートの破片がいくつも空に舞い、同時に火炎が夜空をまばゆく照らし出したときには、少年は何も感じていなかった。オモチャのようであり、幻想でもあるような一景が、不意にパッと踊っただけだった。

しかし、次の瞬間、ドドーンという大音響とともに窓ガラスが激しく音を立てて振動し、やがて地鳴りのように高層アパートが揺れたときには、イワンの手先が細かく震えた。体のなかが凍りついたように冷たくなり、父親の顔を思い浮かべながら、彼はまだ叫ぼうとしなかった。彫像のように動けないまま、イワンはたちまち第二の爆発を目にした。

今度は火の柱が空高くまっすぐ昇ってゆき、大きな塊も吹きあげられた。じっと目を

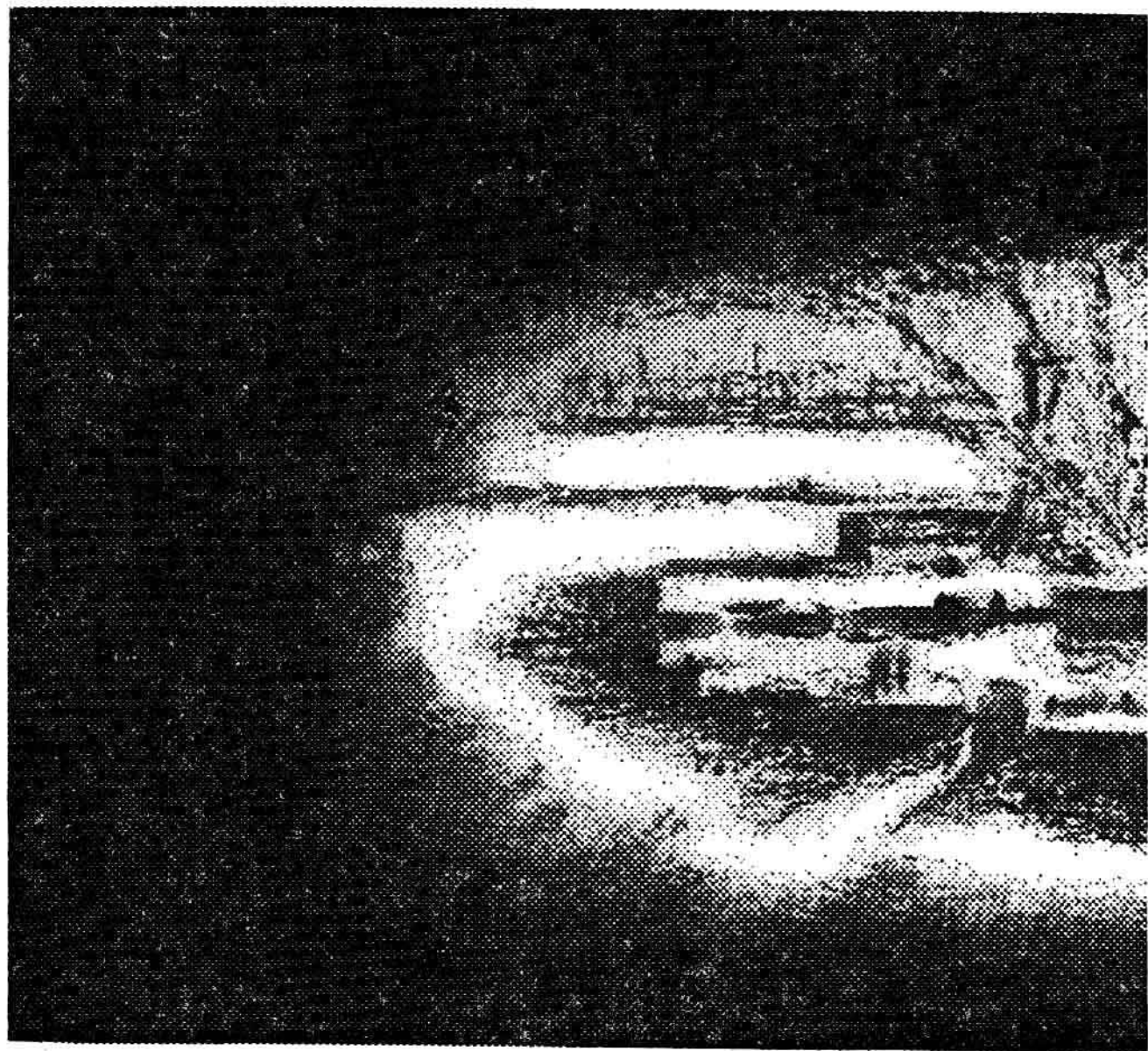


凝らすと、その塊がゆっくりと建物の別のところに落下してゆき、屋根を破壊したようだった。

おそろしいことが起こったのだ。

少年の両手は胸のまえで固く握り合わされ、思わず唇からささやくような言葉が漏れた。

「ああ、神様、どうか助けてください……神様、これが嘘でありますように……お願いします。僕たちは死んでしまう……殺さないで、まだ殺さないでください」



こう言い終えてから五秒もたたないうちに、不思議な音響が少年の耳に流れこんできた。自分の住んでいる高層アパートのあちこちで、爆発音に気づいた人びとが夢からさめ、起き立って窓を開くと、大火災が目飛びこんできた。誰もが甲高い悲鳴をあげていた。

その声がイワンの恐怖心を一気に爆発させた。

—— 本当だ。嘘じゃない。爆発しちまったんだ。もう駄目だ。何もかも終りだ。みんな叫んでるぞ。俺は全部見てたんだ——

こう胸のなかでつぶやいた時、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「イワン」と言ったきり、母親は口をつぐんで、そこに立っていた。

「燃えてるよ、お母さん。どんどん火事が大きくなっていくよ！ ねえ」

相変らず外を見やっているイワンの両眼から、涙がぼたぼたと枕に落ちはじめ、唇がげじげじのようになったかと思うと、彼はいきなりベッドから飛び出し、床に膝をついて坐りこんでしまった。肩が大きく呼吸をしていた。

これに応えてやれるような出来事であれば、母親のターニャはどれほど心が救われただろう。

少年は拳を握りしめながら立ちあがると振り返り、いよいよ高まってゆくアパートのなかの騒ぎを耳にしなが、今度は母親の顔を見つめた。薄暗がりのなかで蒼白になったきり、

ターニャは身動きひとつしなかった。その姿はこれから家族にふりかかってくる災難を見透^{みす}かしたかのように、イワンの目に心細いものに見えた。

しかしふたりは、それほど長く視線を合わせ、意味深い言葉を交していることができなかった。

「電話が通じない」と、荒々しく野太い声を出しながら、父親のアンドレーがふたりの間に入ってきた。「イネッサを起こして、逃げる用意をしよう。さあ、ターニャ、子供たちを助けたくないのか」

すでに廊下を走るやかましい足音が、アパートじゅうに響いていた。何人かの男たちは家財道具を両腕いっぱいにかかえて階段をおりてゆき、自分の車まで運んでゆこうとしていた。窓から直視できるチェルノブイリ原子力発電所は、ますます火勢を強めている様子で、目を向けるたびに、炎全体の高さが一メートル、また一メートルと上空に大きな円弧を描きながら力を広げている。

「これが」と、ターニャはようやく口を開いた。「私たちの信じてきた世界一安全な発電所だったのね」

烈^{はげ}しい怒気がこもった最後の言葉だった。

根拠のないことではない。夫のアンドレーから、絶えずそう聞かされ、実際、つい昨日ま

で、事実がそれを実証してきた。誰もがそこに信を置いていた。これほどおそろしい落とし穴があると、アパートの住人の誰が予測できただろう。

一体、それがなぜ爆発したのだ。

あの発電所とは、何ものだったのか。

ここプリピアーチの町は、世界一の原子力基地をめざしていたし、その日が訪れるのにあと二年のプラン、という急速な発展を遂げてきた。アパートの住人は、みな誇り高い発電所の職員家族だった。なかでもアンドレー・セーロフはこの発電所の古参組で、一点の曇りもない自信を抱いて、設計から運転作業のすみずみに至るまで監督してきた男だ。

彼は、物事を冷たく観察し、疑い深かった。自分自身に絶えず疑いを抱き、最悪の事態が百パーセント起こらないと保証できるまで、すべての指示に確認を怠らなかった。しかし、すでに今夜は、妻のひと言が彼の全人格を否定してしまい、それに反論することもできない。現に、「アンドレーの発電所」は燃えているのだ！

決死の覚悟

イワンは父親の顔に目を向けようとしなかった。アンドレーが手渡そうとしたバスタオル

を、床に叩きつけた。

「こんなものを頭に巻いたって、助かりやしないよ」

「いや、車まで行く途中で、ずいぶん違う。いいから、巻いてくれ。まだ死ぬと決まったわけじゃない。生きられるんだ。約束する」

その言葉に気を取り直したターニャは、床に落ちたバスタオルを急いで拾いあげると、息子の手に握らせた。それから彼女は、窓の外に一瞥を投げかけると、正体もなく寝入っている下の娘のベッドに走った。

イネッサは、まだようやく十一歳の誕生日を迎えたばかりだった。娘を抱きあげようとした瞬間、拡声器から流れる陰にこもった声で、アパートの住民に退避を呼びかける警告が、窓の外から聞こえた。

避難の準備を急ぐように……荷物を最小限にとどめるように……消防隊が消火作業を続けているので不安を抱かないように……子供を先に逃がすように……子供たちには薬を配るので、ただちに飲ませるように……窓を完全に閉めておくように……

次々と耳に飛びこんでくる言葉は、いたずらに恐怖心をあおらないよう注意深く選んで語られていたが、いよいよ底知れぬ現実がそこまで来ている緊迫した状況を伝え、三人の胸を鋭い剣のように貫いた。

やさしく起こされたイネッサは、日頃^{ひごろ}から体は弱かったが、気は強かった。父と母ばかりか、兄までが夜中に起きているのをいぶかしく思いながら三人の顔を順に見やったが、ただ事ではない様子を相手の目から読み取った。

急いで事情を教えられると、少女は早口に

「どこへ逃げるの」と尋ね返した。

「遠くだ」と、アンドレーの口から勢いよく言葉がついて出た。「ともかく、できるだけ遠くへ逃げるんだ。いいか、離れられるだけ町から離れろ。いいな、三人ともだ」

ターニャはその言い回しを耳にした途端^{とたん}、膝がくずれおちそうになった。

「あなたは、ねえ、あなたは逃げないの」

「俺は」と言って、夫は視線を下に落としたがらターニャの両肩に手をかけた。「しばらく残って様子を見る。大丈夫だ。俺は、責任者のひとりだ。逃げれば、卑怯^{ひきよう}な男にされちまう。

違う。俺には責任がある。それより、早く水筒に水を入れろ。それから食べ物と着替えを早く用意してやれ。イワンとイネッサ、いいか、何があってもお父さんのことを覚えてろよ。

そうすればかならずまた会える。はつきり言っておくが、お前たちは遠くに連れていかれるだろう。それがいい。できるだけ遠くの町へいけるように頭を使うんだ。ターニャ、君もだ」

これは、普通の火災ではなかった。原子炉が爆発し、容易なことでは燃えないはずの黒鉛が燃えているのだ。冷静な原子物理学者が分析すれば、「すでに爆発したのだから、もう水をかけてはいけない。そこに水を注げば、内部の核反応にふたたび火をつける」と忠告したかも知れない。しかし現場に駆けつけた消防士には、ただの火災でしかなかった。

火の手は、爆発した四号炉から隣の三号炉まで広がろうとし、さらに危険な状態になる可能性が高かった。消防士は文字通り決死の覚悟で建物のなかへ突進してゆき、あるいは至近距離まで近づいて放水を続けた。延焼を食いとめる作業に全精力が注がれていたのである。

一方で、爆発した四号炉の火勢はとどまるところを知らず、内部から煮え立つ金属が上空へ噴出して、アンドレーが窓から俯瞰する限り、ほとんど絶望的な事態を迎えていた。

もくもくと煙をあげる通常の火災と違って、火の煙突が一本の直立した円柱となつてどこまでも上へ伸びていく様は、それがどれほど激しい上昇気流であるかを物語っていた。

イワンの目は、夜景を眺めやっている父親の背中が、力なく丸まっているのに気づいた。かつて一度も見たことのない痛々しい姿勢だった。

「お父さん、一緒に逃げて！」と思わずイワンは叫んだ。「もう終りだよ。こんな所に残ってたって、何にもなりやしない。みんな逃げるし、残ってれば死ぬんだ。死ぬんだよ。僕らと、もう会えなくてもいいのか」